



イエズス会によるボローニャ、サンタ・ルチア聖堂 の装飾事業について

宇埜, 直子

(Citation)

美術史論集, 15:179-188

(Issue Date)

2015

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010469>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010469>



イエズス会によるポローニヤ、サンタ・ルチア聖堂の装飾事業について

《キーワード》サンタ・ルチア聖堂、イエズス会

宇 埜 直 子

はじめに

ポローニヤにおけるイエズス会の活動は一五四六年から始まる。聖フランシスコ・ザビエルが一五三七年に布教のために同地を訪れたが、彼に心酔した人々やフランチェスコ・パルミオ（一五一八一—一五八五）¹の熱心な要請に応じて、イエズス会士たちがポローニヤに派遣され、その年からサンタ・ルチア聖堂に居住し始めた。²現在、同聖堂はポローニヤ大学の講堂となっており教会としての機能は果たしていないが、マシーニによると、ポローニヤの司教で守護聖人でもある聖ペトロニウスその人によって五世紀に建てられた非常に歴史の古い聖堂であった。³

イエズス会士たちによる聖堂の装飾計画は、ザビエルを歓迎した部屋が礼拝堂に昇格されたとき、つまり一五六四年に始まり、一五六八—七二年に主祭壇と両翼廊の祭壇が調えられた。一五七六年に長い間要望していた聖堂の拡張が許されて最初の改築工事がな

された。二回目の改築工事は十七世紀半ばから始められ、九つの祭壇と八つの礼拝堂を備えるものとなった。⁴二回目の拡張より前の聖堂内部の装飾については、アルキジンナージオ図書館に所蔵されている一六〇三年のカヴァッツォーニによる未刊行のガイドおよび十七世紀半ばのマシーニとマルヴァジアのポローニヤのガイドが有用である。⁵また、刊行されている聖堂の設計図、および司教区古文書館に所蔵されているイエズス会の史料もそれらを補完する。⁶

一六〇三年のカヴァッツォーニの手稿がサンタ・ルチア聖堂の祭壇画についての最初の言及である。判明しているものはロレンツォ・サバティーニ《割礼》（図1、グリーンビル（サウスカロライナ）、ボブ・ジョーンズ大学美術館）⁷、《聖母子、聖ルチア、聖アガタ》（図2、ポローニヤ国立絵画館）、《聖母子と諸聖人》（ベルリン国立美術館）⁸、オラツィオ・サマッキーニ《聖母子と諸聖人》（図3、プルナロ教区聖堂（ブドリオ、ポローニヤ））⁹、および、フェデリコ・ズッカリの《聖グレゴリウスの行列》（作品は消失、二点の版画のみ、

図4、5)⁽¹¹⁾、デニス・カルヴァールト《無原罪のお宿り》(図6、ポローニヤ、サンタントニオ・アバーテ聖堂)⁽¹²⁾、そしてカヴァッツォーニがプロスペロ・フォンターナと表記しているが、近代の帰属では娘のラヴィニアの作ともされる《磔刑》(図7、ポローニヤ、サンタントニオ・アバーテ聖堂)⁽¹³⁾である。

一六五九年、二回目の改修後の聖堂で最初のミサが行われたが、おそらく財政的な問題で内部装飾は完成しておらず、徐々に加えられることとなる。このとき、それまでの聖堂はコレッジョ・デイ・サンタ・ルチアに併合され、それまでにあった祭壇画の中には新たな聖堂に移されたものと、別の場所(コレッジョと聖堂に追加されたポルテリア Porteria)に移動されたものがあつた。⁽¹⁴⁾一七〇〇年代末のナポレオンの接収のときにいくつかの作品は散逸し、また、一七七三年のイエズス会の撤廃の後、バルナバ会がカステイオーネ地区の管理においてイエズス会の後を継いだ⁽¹⁵⁾が、彼らはサンタントニオ・アバーテ聖堂に本部を移し、現在同聖堂にある二点の作品はイエズス会のほかの文物とともにこのとき移されたものである。

本論は、二回目の改修前、一五〇〇年代のサンタ・ルチア聖堂に存在していたことがわかつていくつかの祭壇画について考察し、当時の配置の再現を試みるものである。最後に同時期のローマのイル・ジェズ聖堂と比較し、イエズス会の美術政策について考察する。同時期のイル・ジェズ聖堂は一貫した装飾プログラムをもつことが明らかにされているが、サンタ・ルチア聖堂ではその方針に一致点と相違点がみられ、その理由について考えたい。

一、各作品について

年代が最も早い作品は聖マタイに捧げられた右第三礼拝堂にあつたロレンツォ・サバティエーニ(ポローニヤ一五三〇—ローマ一五七六)の《割礼》(図1)である。ボブ・ジョーンズ大学所蔵のオラツイオ・サマッキニ(ポローニヤ一五三二—一五七七)に帰属されていたこの絵を、ヴィンケルマンがサバティエーニ作とし、以前サンタ・ルチア聖堂にあつたものに同定した。⁽¹⁶⁾祭壇画が捧げられていた場所は一五三七年にフランシスコ・ザビエルをもてなした小部屋があつたところで、パルミオとポローニヤのイエズス会士たちによって常に崇敬されていた。一五七六年から始まつた一回目の改修工事の出資者はマッテオ・ザニで、「奥行十六ピエーデイ、間口十四ピエーデイ」の礼拝堂が作られたが、ザビエルの小部屋が礼拝堂へと移行したのは一五六四年である。⁽¹⁷⁾サバティエーニの祭壇画について、ヴィンケルマンは様式から制作年代をフィレンツェへ向かう前の一五六三—六五年頃に設定したが、サッスも同意する通り、礼拝堂へ昇格した年に祭壇画が注文されたと考えられるのである。⁽¹⁸⁾また割礼という主題について、この主題はイエズス会士にとつては象徴的な価値を持つ。⁽²⁰⁾修道会の名前はイエスの名からそのまま採られたものだが、イエスと命名されたのが割礼の当日なのである。「八日が過ぎ、割礼をほどこす時となつたので、受胎のまえに御使が告げたとおり、幼な子をイエスと名づけた」ルカ二・二一。また、イエスの名前は割礼の手術を通して流された最初の血と結び付けられ、受難の血とも関連付けられた。《割礼》の主題は、イエズス会

の母聖堂であるローマのイル・ジェズ聖堂の主祭壇画としてジローラモ・ムツィアーノによって一五八七年に制作され、その後ヨローロッパ中のイエズス会の聖堂で描かれることになるものである。ボローニャの作品は年代的にはその繁栄よりかなり早い、イエズス会士たちに重要なものであったにちがいない。

主祭壇画である《聖母子、聖ルチア、聖アガタ》(図2)は、カヴァッツォーニのサンタ・ルチア聖堂における最初の記載で、「ロレンチーノ Lorencino」に帰属されており、マシーニもまた「サツバディーニ Sabbadini」作として記述する。すなわち両者はロレンツォ・サバティーニとするが、マルヴァジアはエルコレ・プロカッチーニ・イル・ヴェッキオ(ボローニャ一五一一―一五九五)にとした²¹。いずれも同じ作品、《聖母子、聖ルチア、聖アガタ》を参照していることは間違いない。帰属に関しては近代の研究者たちも意見が分かれる。マウチェッリとグラツィアーニらはプロカッチーニの作品として扱うが、ベナーティとヴィンケルマンはカヴァッツォーニの記述から、サバティーニに帰属し、フリゾーニも追従する²³。おそらく聖堂拡張の際、寸法を大きな祭壇に合わせるためにカンヴァスが接ぎ広げられていたが、最近その部分を取り除く修復を受け、オリジナルの状態に戻されてボローニャ絵画館にある。ヴィンケルマンとサツスの様式的分析によると一五六八―七〇年頃に位置づけられる²⁴。登場するのは聖堂が捧げられていた聖女と、その同郷の聖女である。主祭壇の再建の出資者も上述のサバティーニの作品がある礼拝堂と同様マッテオ・ザニで、多大な出資をしたという²⁵。

続いて、《聖グレゴリウスの奇跡の行列》(図4、5)の主題に関しては、当時のボローニャ人教皇グレゴリウス十三世がこの聖人に傾倒しており、大グレゴリウスに関する主題がローマとボローニャで人気を得ていた。しかしながら、このフェデリコ・ズッカーリ(サントンジエロ・イン・ヴァード一五三九―アンコーナー一六〇九)の作品はサンタ・ルチア聖堂のために制作されたものではない。一五八〇年末にボローニャ、マドンナ・デル・バラツカーノ聖堂ギゼッリ礼拝堂のための祭壇画として、教皇の側近であるパオロ・ギゼッリから注文を受けて制作されたものである。しかしながら、「明るくあるべき色彩が暗かったり、暗い色彩「であるべきもの」が明るかったり、大きくあるべき人物が小さかったり、小さ「くあるべき人物」が大きかったりと遠近法が漏れ落ちており、外観においては均整としかるべき寸法が欠け²⁶。」とボローニャ画壇が批判したため、結局注文主から拒否され、ローマに戻された。ズッカーリはこれをどのように受け止めたか、加筆修正し、教皇を介して強制的にボローニャに送り返したのである。

作品は現在失われているが、ウィーンのアルベルティーナ美術館に所蔵されている同時代の二点の版画からその着想の変遷がうかがえる²⁷。最初のもの(図4)は一五八〇年のボローニャでアリブランド・カプラローリが版刻したもので、つまりバラツカーノ聖堂でこのように見られたというイメージを示す。二枚目は、作者も正確な年代も不詳であるが、いくつかの相違から後のヴァージョンつまりサンタ・ルチア聖堂に安置されたものであることがわかる。前者を見ると、前景のペスト患者たち、グレゴリウスのいる集団、この奇跡に

よって後に「サンタンジェロ」と冠されることになった橋を渡っている行列、そのすべてが、同一平面に置かれているように見え、遠近法の合理性が欠けているように思える。この押しつぶされたような奇妙さは、雲の上に天使といるキリストの構図においても言える。失われた絵は一五八〇年におそらくほんの数カ月で描かれたが、フェデリコ・ズツカリはその同じ頃、ずっと有名なパオリーナ礼拝堂の仕事をしており、そちらの方に力を注いでいたとしても不思議ではない。

一旦ボローニヤから拒否されたにもかかわらず、祭壇画は一五八二年前半にはすでに再びボローニヤに戻っている。フェデリコ・ズツカリはボローニヤにおける否定的意見を受け加筆修正したが、それをイエズス会総長アツクアヴィーヴァに寄進し、彼らのボローニヤの拠点であるサンタ・ルチア聖堂から決して外さないという但し書きとともにボローニヤへ送るよう要望したのである。ボローニヤのイエズス会士たちはその作品がボローニヤ画壇の中で論争を引き起こしたものであったことは認識していたが、それを受け入れたのは、ボローニヤ大司教パレオッティの非常に近い協力者であるフランチェスコ・パルミオが仲介役を果たしたことが大きかったと言われる。²⁸ サンタ・ルチア聖堂はサバティーニとサマッキーニの絵で主祭壇と翼廊の祭壇が飾られたが、ズツカリがその作品をイエズス会士に提供したとき、聖堂にはそれら二点しかなかった。この頃のイエズス会の財政的窮乏は周知のとおりで、代金を支払わずに新たな絵を獲得しうることはパルミオにとって魅力的な申し出だったようである。また、多くの論争を引き起こした作品ではあつ

たが、版画第二ヴァージョン（図5）は向けられた非難に応えるかのように修正を加えたことを示す。上方のキリストと雲は修正され、距離感が現れるように下部から切り離されている。下の風景もより低く設定して、橋の脇の像を小さくし遠近感が強調されている。さらに中央に見える聖母子のイコンを行列が進む方に合うようにやや回転させて、行列にたざさわる人物も整理されている。拒否された理由に、ボローニヤの画家たちにとって、前景の死体は異様であり、祭壇画には適さないと感じられたから、とする説があり、ベナーティはその説をパレオッティの絵画観をもって説明するが、²⁹ 祭壇画を受け入れたパルミオはパレオッティの知己であり、その絵画論の草稿段階からの読者でもあった。かつまた、パレオッティは凄惨な殉教図の効用も理解し、かつ推奨しており、³⁰ 変更後のヴァージョンでも前景の死体は本質的には変わっていない。一六八六年マルヴァジアの記述からわかるように、ズツカリの《大グレゴリウスの行列》は二回目の改築後の新しい建物にも再利用された。これは画家と総長アツクアヴィーヴァとの約束がその通達どおりに果たされたことになる。この作品に従って、それを安置した礼拝堂はサン・グレゴリオ礼拝堂と冠された。

これに対し、帰属に問題が残るのは《磔刑》（図7）である。フォルトゥナーティ・ピエトランツォはラヴィニア・フォンターナ（二五五二ボローニヤ一六一四ローマ）に帰属するが、³¹ サンタ・ルチア聖堂の祭壇画に関する最初の記述を残したカヴァッツォーニは父親のプロスペロ・フォンターナ（一五一二ボローニヤ一五九二ローマ）の作品として示唆した。一六六六年マシーニは後者の帰属

に同調し、その記述からこのときすでにポルテリアに移動されていたことがわかる。³²一六八六年、マルヴァジアは同じ場所でラヴィニア・フォンターナの作品として記述しており、これが前者への最初の言及である。³³一方、マルヴァジアはもう一つの著作ですでにプロスペロと報告し、左下の最長老が父親の肖像であり、そこにのみ、のちに肖像画家として名を馳せるラヴィニアの介入を認めることができるとしていた。³⁴サツスは文献資料と様式分析から、プロスペロへの帰属を提案し、その年代を二五八二年とした。³⁵《磔刑》はカルヴァールの《無原罪のお宿り》とともに、バルナバ会士たちによってサンタントニオ・アバーテ聖堂に移され、現在もここにあるが、ミサを行わないため聖堂が開かれることはめつたにない。

二、二回目改修前の聖堂の祭壇と祭壇画の配置

これまで明らかになっているものをまとめると以下のようになる。

右第一礼拝堂…プロスペロ・フォンターナ《磔刑》一五八二年頃

左第一礼拝堂…フェリーチェ・ピナレッツィ《聖母子》(消失、おそらくフレスコ)

右第二礼拝堂…フェデリコ・ズツカリ《大グレゴリウスの行列》(消失、一五八〇

年にバラツカーノ聖堂のために描かれたが、最終的にサンタ・ルチア聖堂へ)

左第二礼拝堂…デニス・カルヴァールト《無原罪のお宿り》一六〇〇年頃

右第三礼拝堂 (フランシスコ・ザビエルが滞在した場所サニ家の所有)…ロレ

ンツォ・サバティーニ《割礼》(一五六四年)

左第三礼拝堂…ジョヴァンニ・バッティスタ・クレモニーニ《磔刑》(所在不明)
右翼廊…オラツィオ・サマッキーニ《聖母子と諸聖人》一五七〇—七二年頃
左翼廊…サンタ・カテリナ礼拝堂《聖母子と諸聖人》一五七〇年代前半
主祭壇…ロレンツォ・サバティーニ《聖母子と聖ルチアと聖アガタ》一五六八—七〇年

注意深く見ると、サンタ・ルチア聖堂の祭壇画の主題は、向かい合う礼拝堂同士、緩く関連づけられていることがわかる。両翼廊は諸聖人に捧げられ、左右第三礼拝堂は、最初の流血である《割礼》と最後の流血である《磔刑》が安置されている。これはヒツバードが復元したイエズス会の本部であるローマのイル・ジエズ聖堂の一五〇〇年代の祭壇の配置とその解釈方法がポローニヤの聖堂にも適応できることを示す。³⁶一方で、ベイリーは一五〇〇年代のイエズス会は「観者」を意識しており、「特定の観者に合わせて内部の装飾の様式と贅沢さを調整し、特別な機能と場を合わせた」と述べる。³⁷イエズス会士たちは地方の拠点においても同じく柔軟な対応も取り、機能もしくは場所に合わせてそれに適ったイメージを選択していたことがわかる。たとえば主祭壇においては、歴史ある聖堂が元々捧げられていた聖女を選択しているが、これは地元の人々におもねった配慮と考えられる。十七世紀半ばの新しい聖堂における最初の壁画装飾もまた、イエズス会の聖人ではなくポローニヤの守護聖人たちに関連するものであった。³⁸それまでの伝統的文化と自分たちを結びつける目的で、ポローニヤの拠点にはポローニヤの守護聖人が描かれたのである。しかしながら、第二礼拝堂では《グレゴリウスの行列》の対面に《聖母被昇天》が設えられた。前者は予定外の

すでに出来上がった作品の獲得だったために主題的なつながりは無視されたようである。加筆修正していたとはいえ、ボローニャの画家たちの間に大論争を引き起こした絵画をそれでも受け入れたことは、当時のイエズス会の外面的な聖堂装飾への強い意志が感じられる。

イエズス会聖堂に用いられた絵画様式に対する議論は膨大であるが、ボローニャのイエズス会士たちがどれほど考慮していたかは定かではない。ボローニャの初期のイエズス会の装飾に従事した画家はサバティーニやサマツキーニなどトスカーナ・ローマのマニエリスムを志向した画家であったが、画家の選択には礼拝堂は出資者の意向が反映されているようである。ザニ家が出資した祭壇の二点の作品はどちらもサバティーニである。また、描かれる内容への発言権も限られていたようである。サバティーニの《割礼》はイエズス会にとって重要な主題ではあったが、その前景には、天使と福音書記者が大きく描かれている。この場面はルカの福音書で述べられているが、ルカのアトリビュートは有翼の雄牛であり、天使はマタイのアトリビュートであるため、彼は聖マタイということになる。ルカの福音書の出来事にマタイが登場するというこのこじつけは、一五六四年から出資を続けたマッテオ・ザニ（マッテオ・マタイ）の名前にちなむようである。ボローニャには、聖書や歴史の真実を描くべきとする絵画論を執筆したパレオツティ枢機卿がおり、サンタ・ルチア聖堂の装飾に深くかかわったパルミオは彼の右腕であった。けれどもこのような歪曲が起こりえたのは、描かれる細部の選択は注文主に委ねられていたからと考えられる。一五七六年に最初

の改築工事がなされた際も、それは祭壇画として不適格とはみなされず、取り外されるようなことはなかった。同様のことは新しい聖堂においても見られる。左第三礼拝堂はダヴィア家の所有であったが、一六八二年一月九日に安置されたチニャーニの祭壇画には、イエズス会とはそれほど関係があるとは思えない《洗礼者ヨハネ、カルロ・ポッローメオ、カルメル会のテレサ》（ボローニャ国立絵画館）が描かれていた。⁽⁴⁾

結論

ザビエルが訪れたことを契機にボローニャにもイエズス会士たちが定住するようになったが、その拠点であるサンタ・ルチア聖堂は地元の名士の出資で徐々にその体裁が整えられていくことになる。聖堂の装飾プログラムはおそらく同時期のローマのイル・ジエズ聖堂に基づくものであり、《割礼》などイエズス会にとって重要な主題を含む。しかし、主祭壇画には元来聖堂が捧げられていた聖女が描かれ、イエズス会とは直接関係のない細部を持つ寄進者の意向を反映した祭壇画が飾られていた。このように一五〇〇年代の地方におけるイエズス会聖堂の装飾においては、ローマの規範と柔軟性の両方が見出せるのである。

註

- (1) P. Prodi, *Il cardinal Gabriele Paleotti*, 2, Roma 1967, pp. 30-31. 456.
- (2) G. Zarrì, "La Compagna di Gesù a Bologna dall'origine alla stabilizzazione

- (1546 - 1568)", in *Dall'isola alla città, i gesuiti a Bologna*, a cura di G.P. Brizzi e A.M. Matteucci, Bologna 1988, pp.119-124.
- (c) A. Masini, *Bologna perlustrata*, I, Bologna 1666, p.119.
- (4) P. Foschi, "Le vicende costruttive della chiesa e dei collegi dei Padri Gesuiti", in *Santa Lucia: crescita e rinascimento della chiesa e dei collegi della Compagnia di Gesù 1623-1988: storia di una trasformazione urbanistica incompiuta*, a cura di R. Sannavini, Bologna 1988, pp.37-38.
- (5) F. Cavazzoni, *Pitture et sculture et altre cose notabili che sono in Bologna e dove si trovano...*, Bologna, Biblioteca Comunale dell' Archiginnasio, ms. B1343, c. 18; A. Masini, *op cit.*, p.120; C.C. Malvasia, *Le pitture di Bologna*, Bologna 1686, ed. a cura di A. Emiliani, Bologna 1969, p.255.
- (6) Bologna, Archivio Arcivescovile di Bologna, Congregazione ex-gesuitica, 215, *Campione de' monti in essere, censi attivi, censi passivi, case in città et in campagna e chiesa antica e nuova di S. Lucia e sua Sagrestia*; J. Vallery-Radot, *Le recueil de plans d'édifices de la Compagnie de Jésus conservé a la Bibliothèque Nationale de Paris*, Roma 1960, pp.77-79, n.291.
- (7) J. Winkelmann, "Lorenzo Sabatini detto Lorenzino da Bologna", in *Pittura bolognese del'500*, a cura di V. Fortunati Pietrantonio, Bologna 1986, p.598.
- (8) J. Winkelmann, "Lorenzo Sabatini", *cit.*, p.602.
- (9) *Ibid.*, p.604.
- (10) J. Winkelmann, "Orazio Samacchini", in *Pittura bolognese del'500*, *cit.*, p.640.
- (11) D. Benati, "L'attività bolognese di Cesare Aretusi (1549-1612)", *Il Carrobbio*, 7, 1982, pp.37-50; G. Sassu, "Federico Zuccari e la Processione miracolosa di San Gregorio", *Il Carrobbio*, 21, 1995, pp.105-114.
- (12) V. Fortunati Pietrantonio, "Lavinia Fontana", in *Pittura bolognese del'500*, *cit.*, p.730.
- (13) T. Montella, "Denys Calvert", in *Pittura bolognese del'500*, *cit.*, p.686.
- (14) C.C. Malvasia, *cit.*, p.256. 新しい聖堂におおつて、主祭壇には《聖母子》、聖ルチア、聖アガタ》、右第一礼拝堂には《聖グレゴリオスの行列》が残され、ファサード裏の入口扉の上にはオラツィオ・サマッキニー《聖母子と諸聖人》が移動された。
- (15) J. Winkelmann, "Lorenzo Sabatini detto Lorenzino da Bologna", *Pittura bolognese del'500*, *cit.*, p.598.
- (16) P. Pirri, *Giovanni Tristano e i primordi della architettura gesuitica*, Roma 1955, p.245.
- (17) G. Sassu, "Note sull'attività di Lorenzo Sabatini per i gesuiti bolognesi", in *Scritti di storia dell'arte in onore di Jürgen Winkelmann*, *Accademia clementina di Bologna*, Napoli, 1999, p.317.
- (18) J. Winkelmann, "Lorenzo Sabatini", *cit.*, pp.597-598.
- (19) G. Sassu, "Note sull'attività di Lorenzo Sabatini per i gesuiti bolognesi", *cit.*, pp.317-318.
- (20) L. Réau, *Iconographie de l'art chrétien*, Paris, I, pp.254-260; E. Mâle, *L'arte religiosa nel '600: Italia, Francia, Spagna, Fiandra*, Milano, 1984, ed. Paris 1932, pp.371-372; H. Hibbard, "Ut picturae sermones", in *Architettura e arte dei gesuiti*, a cura di R. Wittkower e I. B. Jaffé, Milano, 1972, p.31; 書籍『《トロント十五の繪圖》再考——「神殿奉禮」場面を中心として』『美術史論集』第十四号、神戸大学美術史研究会、二〇一四年、五十五—七十二頁。
- (21) F. Cavazzoni, *op cit.*; A. Masini, *op cit.*, p.120; C.C. Malvasia, *op cit.*, p.255.
- (22) E. Mauceri, "Erucolo Procaccini, Bologna", *Rivista Mensile del Comune*, 5/6, 1926, pp.7-8; A. Graziani, "Bartolomeo Cesi", *Critica d'Arte*, 20-22, 1939, p.68.
- (23) D. Benati, "Ercole Procaccini", in *Pittura bolognese '500*, *cit.*, p.450; J. Winkelmann, "Lorenzo Sabatini", *cit.*, p.602; F. Frisoni, "Le pale d'altare dei gesuiti", in *Dall'isola alla città, i gesuiti a Bologna*, *cit.*, p.95.
- (24) G. Sassu, "Note sull'attività di Lorenzo Sabatini per i gesuiti bolognesi",

cit., pp.309-310.

- (52) P. Pirri, *op. cit.*, p.246.
- (53) G. Sassu, “Federico Zuccari e la Processione miracolosa di San Gregorio”, *cit.*, p.106.
- (54) *Ibid.*, p.105, 107, 109.
- (55) *Ibid.*, p.109.
- (56) D. Benati, “L’attività bolognese di Cesare Aretusi (1549-1612)”, *cit.*, pp.37-50.
- (57) I. Bianchi, “Santi e martiri «in sì strane guise tormentati»: la cripta della cattedrale bolognese”, in *La politica delle immagini nell’età della Controriforma : Gabriele Paleotti teorico e committente*, 2008 Bologna, pp.95-170.
- (58) V. Fortunati Pietrantonio, *op. cit.*, p.730.
- (59) A. Masini, *op. cit.*, p.120.
- (60) C.C. Malvasia, *op. cit.*, p.256.
- (61) C.C. Malvasia, *Felsina pittrice: vite dei pittori bolognesi*, 1, 1678, ed. 1841, p.176.
- (62) G. Sassu, “Intorno ad un dipinto a due mani: tra Prospero e Lavinia Fontana”, *Il Carrobbio*, 23, 1997, pp.81-91.
- (63) H. Hibbard, *op. cit.*, p.29-50.
- (64) G. A. Bailey, *Between Renaissance and Baroque : Jesuit art in Rome, 1565 - 1610*, Toront, 2003, p.261.
- (65) F. Frisoni, *op. cit.*, p.97.
- (66) G. A. Bailey, *op. cit.*, pp.3-37 44-47°
- (67) G. Paleotti, *Discorso intorno alle immagini sacre et profane diuiso in cinque libri ...*, Bologna, 1582; P. Prodi, *Ricerche sulla teoria delle arti figurative nella riforma cattolica*, Bologna 1984.
- (68) F. Frisoni, *op. cit.*, p.97.

〔付記〕

本論文は平成二四年度組織的な若手研究者等海外派遣プログラムの研究成果の一部である。

宇埜直子（うの・なおこ）

二〇一二年三月 神戸大学大学院文化科学研究科博士課程修了

二〇一二年四月― 神戸大学大学院人文科学研究科研究員

二〇一四年四月― 大阪成蹊大学非常勤講師



図2 ロレンツォ・サバティーニ《聖母子、聖ルチア、聖アガタ》ボローニャ国立絵画館



図1 ロレンツォ・サバティーニ《割礼》グリーンビル（サウスカロライナ）、ボブ・ジョーンズ大学美術館



図3 オラツィオ・サマッキーニ《聖母子、聖ペテロ、聖フランシスコ、聖ウィンケンティウス》プルナロ（ブドリオ、ボローニャ）、サン・ロレンツォ聖堂



図5 フェデリコ・ズッカリ《聖グレゴリオスの行列》1583年以降



図4 フェデリコ・ズッカリ《聖グレゴリオスの行列》アリブランド・カプラローリ版刻、1580年

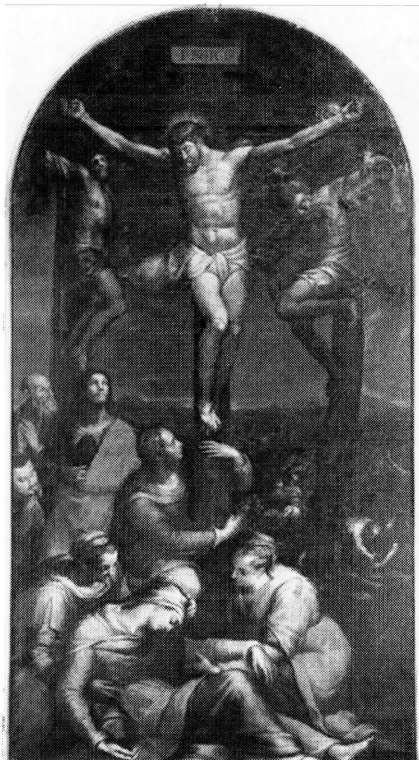


図7 フォンターナ《磔刑》ボローニャ、サンタントニオ・アバーテ聖堂



図6 デニス・カルヴァールト《無原罪のお宿り》ボローニャ、サンタントニオ・アバーテ聖堂